Re:カンストから始める不死者の王

カコナール

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

リゼロとオバロのクロスです

ナザリックがエリオール大森林に転移しました

矛盾、オリジナル設定満載です！ご容赦を（汗）

目次

絶対強者？ ―― 1
ナザリック初見攻略～墳墓～ ―― 6
異世界転移？ ―― 12
同郷者 ―― 15
邂逅 ―― 23
始まりの一歩、途中の躍進 ―― 27
墳墓の住人 ―― 32
統率方針 ―― 36
妄言、虚言、無限に実現 ―― 51
人は見かけによらないって ―― 58
森妖精タラシの竜と、竜タラシの人間

絶対強者？

ヘロヘロと別れ玉座の間に訪れたモモンガはアルベドの設定を眺めて今はログインしなくなったタブラの残した物へと思いを馳せていた

「はあ、設定の最後が『ちなみにビッチである』か。そういえばギャップ萌えとか言ってたっけな…最後くらい」

モモンガはスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを振るいギルド長権限によりアルベドの設定を変える

『モモンガを愛している』かはぁー恥ずかしー」

両手で顔を覆うモモンガ

『『愛している』はなんか重いから『恋している』にするか」

『モモンガに恋している』

「ふう…サービス停止まであと5分くらいか。」

「楽しかった。本当に楽しかったんだ」

―２３：５９：５９―
―００：００：００―
―００：００：０１―

「―時間が過ぎてもサービスが終了しない!?」
―どういうことだ?停止の延期?まずは運営に連絡を…
「メッセージ／伝言」
―反応は無しか

―カーソルもないどうなっているんだ?
「どうなさいましたか?モモンガ様」
「ああ、運営にメッセージが届かなくてな」
「すみません。無知な私にはメッセージと言うものがなんなのかわかりかねます。どうか教えていただけませんか…
―ＮＰＣがしゃべっている!?

モモンガは闘技場にいた
「今後も忠義に励め」
【は！】
―何この高評価
守護者の反逆を念頭に置いた集会のようなものはむしろ重き忠義を味あわされることになった

―!
「モモンガ様私に発言のご許可を」
「シャルティアそれはこの場では不敬と分からないの？」
「罰は甘んじて受けます。ご許可を」
「シャル…!!
「よい話せ」
「第一階層のモンスターが次々に倒されております」
―!!
話が終わりかけると同時に

「モモンガ様」
「どうしたセバス」
　偵察へと向かわせていたセバスが闘技場へと入ってきた
「外ですが辺りを見渡す限りの森林となっておりました」
「それは本当か?本来ならば沼地のはずだが」
「それだけにございません全て氷漬けとなっておりました」
―氷漬け?ニヴルヘイムなどの他の世界に転移させられたか
「モモンガ様。第一階層が半壊しております」
―!!

「どぉーしたものかぁーね結界におかぁーしな圧を感じたかと思えば急にお墓が出来てるんだもんねぇ」
「ロズワール様、これはお墓と言うよりは墳墓かと思います」
「墳墓、墳墓かすると差し詰め地下墳墓といったとこかぁーね」
「エル・ドーナ」
「フーラ」

道化のような男と桃色の髪の女は次々と現れるスケルトンを倒して行く
「わたーしの領地に現れたものなら調べないわけには、いかなぁいよね？」
「来てみれば見境無しに襲ってくる骸骨ども最初に火系統の極低温系が全く効かないときは癪に障りましたけどね」
「ラムは無理しないこと付いてくるだけでいいんだぁよ」
「はいロズワール様」
このような会話の最中にも回りのスケルトンは次々と粉々にされて行く

――面白い何年ぶりの侵入者かナザリックの力を思い知らせようではないか

ナザリック初見攻略～墳墓～

スケルトン、ゾンビ等の残骸が転がる薄暗い空間には風も吹かぬが冷ややかな空気は感じる

「ロズワール様なぜこの建物から入ったのですか？」

「そぉれはここが一番大きいかぁらさ深い意味はないよ。福音のなくなった今だからこそ、そこまで考えずに行動できるのかぁもね」

二人の前には扉がある。そこには寺に近しい建物がある

「地下に広い空間でも驚ぉきなーのに、見たこともない建築用式の建造物、ただごとじゃあなぁーいね。危なくなったらすぅーぐ帰ろうか」

「バルスに負けてからずいぶん萎らしくなられましたねロズワール様」

「ラムは聖域のあとから言葉が素直になったぁものだぁね」

そう言いつつロズワールと呼ばれた男は扉に手を掛ける

扉が開き始める

…━クチャネチャグチャアァ

ナザリック地下大墳墓１０階層━玉座━

「アルベド用意は出来たか？」
「はいモモンガ様。各階層守護者の配置、フィールドエフェクトの発動準備、遠隔視の鏡、ゴーレムの起動準備等、防衛用意とモモンガ様のご命令、滞りなく」
「よい。素晴らしい働きだ」
「は、お褒めに預り光栄です」
「ならば、遠隔視の鏡を」
赤金色の髪のメイドがその身長と同等程度の鏡を持って前へでる

━不味いなぁ魔法はなんとか使えたけれどアイテムは確かめていない…
しかしここで格好の悪いところを見せるわけにはいかないよなぁ…よし！

「魔法道具：ミラー・オブ・リモート・ビューイング起動！」

訪れる静寂

「くふぅ！」

淡く光るのはモモンガの体

―また精神の沈静化がされるなんて…

「シズδこちらへこい」

「はいモモンガ様」

赤金色の髪のメイドがモモンガの近くへよる

―ここは素直に聞くべきか？いやそれで不信感が高まり背信、それはまずいどうする？どうする!?俺！

「モモンガ様、こちらの遠隔視の鏡。音声認識がモモンガ様ではありません。御手での御操作を」

「そ、そうかわかった」

―誤魔化せ…ないよな。ああ、不安がたまる

そこから数分はじめてスマートフォンを持ったお爺さんのようなぎこちなさではあったが遠隔視の鏡をある程度使えるようになった。

「ほう。人間種か」

そこへ写るのは寺のような建物の前へ立つ侵入者

「お手並み拝見。といこうか」

モモンガは椅子に深く腰かけた

グバァ！

「…シッ」

ロズワールが手をかけた扉が口をあけ、目の前の獲物を捕食せんと襲いかかる

グニャン

そこから飛び退くために力を溜めた足。その足元が動き出す

が、そこで動けなくなるロズワールではなかった一飛びに後ろへ下がる。もとの場所には動く扉と、動く床。

アンデット・扉擬態魔
床擬態魔
どちらもレベル１０程度の奇襲用モンスターだ

「あぁらまあこれまた見たことのない物が出てきた物だあね」
「エル・ゴーア」
右手から放たれた人の頭ほどの火球が扉擬態魔の下部に当たるとそこから２体のモンスターへと燃え移り
ガァァァ…
一瞬の間に２体のモンスターは倒される
「エル・ゴーアだと少し強すぎたかぁもしれないねぇ。いくよ、ラム」
「はいロズワール様」
二人は扉擬態魔のいなくなった入り口へと進んで行く、入るとそこは暗く奥の見えない空間となっている
音が聞こえる裸足で歩いている用な音が爪で固いものを引っ掻く用な音が棒が当たる音が音が無数に無数に
ペタヒタカツガリコンペタッヒタッカツッガリッコツンヒタッガタガタガヤガヤガ

ヤパオーンガラガラズルペタ

「うーん…あぁんまり良ーい予感はしなぁいねぇラム下がってなさい」
「ロズワール様、お気をつけて」
「ウル・ペルーア」
ペルーアは陽属性の魔法で明かりで照らすことの出来る魔法だそのウル級となると半径１００メートルほどの範囲を照らすことができる
ヴァァガラガラヴォォォパオーンヴゥゥゥカラカラシュルシュル
一斉にロズワールを見るそれらはゾンビやスケルトンの類いだが、
「これはこれは窮屈そうだぁね」
５０メートル四方ほどの部屋に数えきれない程の
「まったく、うっとおしいわ」
種類がいるように思えた

異世界転移?

モモンガは遠隔視の鏡に映る光景を見ながら考えていた

Ｉユグドラシルにはない氷のワールド、知らない魔法、人間のように動くＮＰＣや様々な動きを見せるモンスター、嗅覚、というか五感すべてがあるきがする。初めはデータを引き継いで新しいゲームが始まったのかとも思ったがどうも違う気がする…あらゆる動きが自然すぎる表情が動くというのも。もしかするとゲームの中などではなくここは現実なのでは?滑稽と思われるかもしれないがそう判断できる材料が多い…

鏡には今も侵入者の戦いが映り出されている

宙に浮き道化の顔に薄い笑みを浮かべ火球／ファイヤー・ボールのような魔法を次々と流星群のようにアンデットの群れにぶつけている

「ごーあ?ふーら、やはり聞いたことがない」

ＰＶＰにおいて対戦相手の情報収集はこの上なく大切だ。このことをモモンガは重要視していたためユグドラシル時代の魔法やスキルなどは大半を覚えている

侵入者が火球の雨を降らせる中ひときは大きな爆発がおこりまわりのアンデットに活力がみなぎる『疫病爆撃手』だ倒されると辺りに負のエネルギーを撒き散らし爆発する負のエネルギーはアンデットにとって回復のような効果をもたらしそうでないものには状態異常にかかりやすくなる。さらに負のエネルギーを蓄積させればさらなるバットステータスを与えることとなる。

侵入者は火球の効かぬ相手には風の刃を、効果が薄ければ氷の槍を、土の壁をと次々技を変え戦っている

モモンガは思う

「もしもここが現実だとしたら…」

―現地の住人と不仲になるのは避けなければならないのではないか?

「…ならば」

「久々にこんなに戦闘に魔法を使ったーぁねぇ」

彼の前には動物の骸骨に乗る骸骨や武具を纏った骸骨、様々な動物のゾンビ、人のものではあるが原型からは遠退いたゾンビ等の敵が無数に立ち塞がっていたがそれももう大半が動かなくなりほぼ制圧しはじめていた

「これは…あまり良いものでは無いね」

そこに感じた違和感。６属性に精通する『魔導の加護』により気付けた予兆、その直後。空間に虚無が生まれるとそこからは

「こーおれはまたとんでもないものに出会ったかな」

純白のドレスに身を包む美しい女性

黒の執事服に身を包む白髪白髭の男性

漆黒のローブに身を包む骸骨が現れる

「我が名はアインズ・ウール・ゴウン。まずは我が配下の者達の無礼を詫びよう」

骸骨の魔王はそう口にした

同郷者

遠隔視の鏡を見ていたモモンガは唐突に立ち上がり
「アルベド私は行くぞ」
「あの、侵入者の所へですか?」
「そうだ」
そう言い放つ
「あぁ～モモンガ様!その御手をもってして侵入者を迎え討とうと言うわけなのですね!」
「違う!違うぞ!アルベド　私はあの侵入者との和解をするために向かうのだ」
「!!すみませんモモンガ様　ですが、なぜなのでしょうか?無知な私にお教えください」
驚愕にアルベドの目が見開かれたあとに恭しくそう訪ねるのだった
「考えるのだアルベドあの物の格好、技に見覚えがあるか?シズも考えてみてほしい」
「確かに…覚えはありません」

「私も、記録にない」
「ということは、向こうも私達を知らない可能性があるわけだ情報の足りない中、敵を無為に作る必要はない」
「それに、入れセバス」
「は、モモンガ様」
「セバスには引き続き外を先程よりも広範囲を探索してもらった。報告をたのむ」
「はい。では御報告させていただきます
　まずは、この氷の森の範囲ですがかなり広大です。西に森を抜けた先にはは建物や村がありました。あの二人はそこから来た模様です。なおこの森には冷気の継続ダメージ判定があるようです。西以外の3方向には特に目立つものは見当たりませんでした。」
「ふむ。やはりシズこのようなワールドは記録にないな?」
「はい。モモンガ様」
「このように情報が不足しているなか、戦闘を継続するのは愚策だ。もしかしたらあの侵入者が本気を出したらナザリックが滅ぶかもしれぬだろう?」
「モモンガ様!そのようなことが…!」
「可能性は0ではない、ならば最悪を想定して行動するべきだろう」

「モモンガ様でしたら私が和解の使者として出向きましょう。侵入者が無差別に攻撃してこないとも限りませぬゆえ」
「これは私が行かねばならぬのだお前達にはまだわかるまい」
「「…!!」」
「でしたら！せめて護衛につかせて下さいませ！モモンガ様に危害が加わる可能性を指を咥えて見ているわけには行きません！」
「む…それは問題あるまい。ならば、ゆくぞ！アルベド、セバス」
「アルベド！ナザリック内の防衛機能を最大に引き上げろ。セバス、六連星を各階層守護者に振り分け配置させろ」
「「は！」」

準備が完了し、モモンガが魔法を発動する
「上位転移／グレーター・テレポーテーション！」

視界が一気に切り替わる。目の前というには少しだけ遠い位置に先ほどから見てい

た道化が部屋の入り口付近には桃色の髪の少女がいる。

―やはり、最初に名乗るのが社会人として当然か。今回はアルベド、セバスがいるから仕方ないが少しだけ高圧的に行くのは勘弁してくれ…

「我が名は…

ふと考えがよぎる

―アインズ・ウール・ゴウンの名を名乗れば俺が有名になったときに気付く人がいるんじゃないか？

…アインズ・ウール・ゴウン！まずは、我が配下の無礼を詫びよう。」

―言っちゃったー！

「アインズ・ウール・ゴウン…殿と呼ぶべきかーぁな？まず、ということはその先があると言うことですかぁね？」

道化は片目を瞑り青い目でモモンガを見つめている

―話に応じる姿勢だな。言葉も通じている、ということは日本人なのか？

「か…か…下等生物があぁぁあ!!」
「アルベド!?」
「私が恋して恋い焦がれて恋熱に焼き付くされるほどに思い焦がれているモ…アァインズ様に様に!なんだその言葉遣いはぁ!身の…身の程をしれぇぇ!」
「っ!落ち着くのだ!アルベド!」
「ですが!アインズ様!」
―私がアインズ・ウール・ゴウンを名乗ったのを聞いて、激情に飲まれても対応し、アインズと呼ぶ…本当に優秀で嬉しくなるな
「いやぁ、ここまで激情をぶつけられたことはなーぁいねぇ。だが、アルベドと名乗っていた貴方様の仰っていることは自分本位的にすぎるそれが私に適応される理由を聞こうじゃーぁないの」
―こいつ!
「こ…の…!」
「すまない、私の部下の暴走は私の責任だ…
「アインズ様!」
…だが、貴方の発言も挑発の色が濃いと思われる。どうかね?貴方は理知的な方だとお見受けするがこの話を続けても今は無為に時間を使うだけだろう?話をしようじゃ

ないか。…セバス、アルベドを」
「は、アインズ様」
「ア…アインズさ…」
（アルベド様。ここは寡黙を貫かれるのがよいかと）
「…」スッ…
　モモンガの後ろにセバスとアルベドは立ち不動の姿勢をとる
　その最中、一瞬の間に道化の横へと並び間に入れるよう陣取っていた桃色の少女。その少女の肩に道化は手を置き、二人は意志疎通をとり少女は臨戦態勢を解いていた
「では話をするとしよう。私の城まで来るか？それとも君の屋敷へ行こうか？立ち話はなんだろう？」
「できーいれば未知の場所、見たことのない種族のいる所へは出向きたくないのが本音なわけでーぇすよ。わかっていただけるなら、ありがたいのですが？」
「よい。ではそちらに行かせてもらおうか」
――――――――――上位転移――――――――――
「転移魔法…いよいよ油断ならないねーぇ…」

「近隣の屋敷へ転移したのだがあっていたかね？」
「ええ。ここが私の屋敷だーぁよ」

「ラム食堂へご案内して来客用の椅子を」
「わかりましたわ」

少しの時間を置き一同が席についた

「最初に、ここでは認識阻害の魔法を使わせてもらっていることをご容赦願うよいきなり骸骨の姿で屋敷の者達に会われると驚かせてしまうのでーぇね」
「ほう。骸骨はポピュラーでは無いのか驚いていなかったのでいるものだと思ってしまったよ。まあその事については何も問題はない」
「そうかーぁい。助かりますよアインズ殿」
「では私からひとつ目、質問をいいか？」
「どーぉぞなんなりと」
「…いましゃべっているのは日本語だと思うのだが、ここは日本なのか？」
「日本？知らないねーぇここはルグニカ。ルグニカ親竜王国だーぁよ」
「ロズワール様。バルスが来たと以前言っていたのが日本だったかと思いますわ」

「あーぁ確かに…そうかもしれないねぇ。アインズ殿?もしかすると私の館に日本に関係があるものが1人いるかもしれなーぁいですよ」
「…本当か!?会うことはできるか?」
「えーぇ出来ますとも。すこーぉしお待ちください」

邂逅

「…ハァ…ハァ！」
思考が白む。ついて来なくなりかけの四肢に鞭をうって最後の白線まで、そして駆け抜けると
「ッ！ゴォォーール！」
２度３度と前転をした後草むらへと身を投げ出したのは
「素直に驚いたのよ、見違えたかしら」
黒髪の短髪に黒い瞳、ジャージに身を包んだ青年ナツキ・スバル彼が駆け抜けて来たのは森の中に作られた手作りのジャングルジムだその中をパルクールと呼ばれる移動方で走り抜けてきた。
「汗くさいかしら、これで拭くといいのよ」
「くはぁー冷えたタオルが体に染みるねぇ！」
彼、菜月昴は一年ともう少し前に異世界へと来ているそして数多の経験を重ねて騎士と言う確かな立場を確保していた。

「それを用意したのはペトラなのよ。誉めてあげれば喜ぶかしら」
「流石だな！気が利くいいこだ」

彼は異世界に来てある能力を手にしている。死ぬと一定の時間まで戻る「死に戻り」と名付けた能力だ。かつては死ぬことを前提に行動した時期もあったりしたが、いまはそのようなことはしないと自分に誓っている

「…━スバル様ー！」
「噂をすればなんとやらかしら」
「噂をすれば影がさす。な俺の教えたことわざの使い方、完璧だぜ！ベア子！」
「ふん！ベティなのよ？当然かしら！」
「そうだなーさすが俺のベア子だよよしよし」
「ちょ！やめ…なくてもいいかしらしっかり撫でるのよ」

「ベアトリス様、スバル様、ロズワール様が御呼びです。スバル様にお客様です」
「俺にか？珍しいなぁそれじゃベア子戻るぞ。手、」
「ん、そうするかしら」

「…スバル様！わたしもダメ？」
「ペトラ…よし！みんなで帰るぞ！」

「おかーぁえりスバル君さっそくだーぁけど君に、お客様だぁよ」
「おお？ロズっちがお出迎えとはめずらしいな」
「えーぇ君のお客人が君とだけ話したいとのことだったのでね席を外さざるを得なかったのさーぁ。さて、ペトラ案内してあげなさい」
「はい。旦那様」
「お、よろしくな！で、ロズっち俺のお客さんって誰？」
「私ーぁしは1度も見たことのない御方でねーぇ取り敢えず待たせているんだから早くいきなさぁいよ」
「ロズっちが見たことない人ねぇ誰だ？とりえず行くか！」

「…さーあて、これからどうなるのーおかな？楽しみだね」

コンコン

「お邪魔しまーす」

「ふむ。突然お呼び立てしてすまないまずは自己紹介からしようじゃないか」

―え、嘘だろ？

「な…っ！あ…」

「私はナザリック地下大墳墓が主」

菜月昴が目にしたそれは漆黒のローブに豪華な装飾を施しその一つ一つが国庫を揺らがし兼ねない額だと用意に想像できる物に身を包んだ、骸骨であった

「アインズ・ウール・ゴウンだ。よろしくお願いするよ菜月昴くん。」

―魔王の形をした死が立っていた

始まりの一歩、途中の躍進

「お…俺はなまへ名前はスバル菜月昴だ…です。初めまして?ですよね?」
「おっと、そんなにかしこまないでくれたまえ君は生身なんだね私とは違うのか。とりあえず座らないか?」
「あ、はい。そうします」

―まずいまずいまずいまずい
なんでロズワールは平然としてる?他の皆の安否がきになるこいつはヤバい白鯨なんかよりペテルギウスなんかより下手したらあのときのサテラよりもロズワールよりも?
「さて、唐突だが君も日本から来たらしいね?」

―は?
「いやいや、いやいやいや!俺の世界の日本には動く骸骨なんていないっすよ!?」

「ははは！私の日本にもそんなものいないさ！まずは話をしようじゃないか」

――――――……

「ってぇことはだ！鈴木さんはゲームの中身ごとこの世界に来たってかぁ!?俺もとんでもないと思ってたけれどよっぽどとんでも状態じゃないっすか!?」

「君もまだ高校生くらいだろうに随分苦労の絶えない。というか良く生き抜いてこれたものだ。驚くが…」

「まだ、話していないことがあるだろう？」

「う…ぐ、隠してるわけじゃあないんだ…ただ、話せないんだ」

「ふむ、ならば。時間停止／タイム・ストップ」

　まわりの空気が空間が停滞もなく唐突に固まる

「これはっ！」

　―まずいしゃべりすぎたか？

　スバルは身構えるが、

「こない…？」

「なにがだね？」

「いや、この感覚。鈴木さん？なにしたんだ？」

「いや、話にくそうだったからね盗み聞きなんかを気にしているのかと思ってね魔法のある世界だ無理も無いだろう時間を止めさせてもらったよ」
「…っくはぁ!さすがゲームまるごと異世界転移!羨ましいぜ!でも、時間停止か…エキドナの時は一応時間は動いてたし、もしかしたら、、」
「どうだい?多少は話せる状況にできたかな?」
「鈴木さん、」
「む、いまさらだが私はアインズと言う名前で通しているそこのところをよろしく頼む」
「それじゃあ、アインズさん聞いてくれ。俺は死に戻りをして…」

――……

「嘘だろう!?そんな…過酷なんて言葉じゃ、……よく頑張ったな」
「俺も…話できて良かった、本当に。聞いてもらえて」
「…――決めたぞ!俺はアインズ・ウール・ゴウンは騎士ナツキ・スバルに協力をする!」
「なっ!それはありがたいっすけど」
「俺はそんなに頑張れる君が羨ましくてね。元の世界では会社にいってゲームをして寝

るそれだけの生活だった。君の経験してきた道はあまりにも眩しいそして厳しかっただろうその助力を申し出ようじゃないか！」
「ほ…本当かよ!?」
「本当だとも！私は大変感動した！」
　アインズの体が淡い光に包まれる
「っち、感動も高揚も抑制されるか。とにかく本当だともこんななりだが同郷のよしみだしな」
「こりゃあ、百人力どころか万人力だな…」
「これで、話はすべてかな？なら魔法を解こう」
　凍結された時間が動き出す
「くっ！」
「…こない」
「ああ、話の魔女か。時間に干渉出来るようだが停止していれば感知できなかったようだね」
　…バリン！

「…!!」
　アインズの装備品の1つ時之護宝珠が作動する
「時間干渉が行われた、動いたな」
　割れた宝珠の1つを見せる
「そういう、ことかよ」
「私が口にするのも駄目なようだな気を付けよう」

「だが、確認すべきは奇しくも今ので全てすんだと思うがどうだい？スバルくん」
「ああ、俺もそう思うぜアインズさん」

「ならばだ、私の仲間と、君の仲間、双方に情報の擦り合わせをしよう。どうだい？」
「そうだな！これからよろしくお願いします！」
「よろしく頼む共にこの世界を生き抜いてやろうじゃないか！」

墳墓の住人

「セバス、モモ…アインズ様はいったいどのような御方とお話をなさっているのかしらね」
「さて、同郷の方と仰有られていたしました。至高の御方ともしくはアインズ様ご本人と親しい方なのかもしれません。さすれば御対面いたす機会があれば相応の態度で…」
「それは十二分にわかっているわ！」
「左様でありますか」
「私が気にしているのは如何なる高貴なお姿、如何なる崇高な志をお持ちなのかということ！至高の御方々は様々なお姿と多種多様な能力、お考えをお持ちでしたわ。その一端に触れることはナザリックの者として幸せの限りでした。アインズ様お一人となられても衰えることのないそれに加え新しい御方が現れたとなれば。至高の御方々に並ぶとは思えませんけれど、それでも心が高鳴るものがあるというもの！勿論、一番はアインズ様ですけれどね」

「確かに。いったいどのような御方なのでしょうか」
「この部屋まで案内した者は人間と獣人のハーフであったわね。なら！ペペロンチーノ様のように猛々しいお姿の獣人なのでしょうか？」
「どうでしょうか？私の気功で見たところこの屋敷には鬼や精霊、地竜などがいるようですね。武人建御雷様のような厳めしいお姿かもしれませんよ」
「そうなら…」
　二人が想像に花を咲かせているのは仮ロズワール邸の一室。客人用の休憩室だ。アインズに重要な話だと言われ同席をしていない。ここまで案内したのはロズワールのメイドの1人フレデリカ・バウマンだ。雑談しているとはいえ、双方警戒を怠っているわけではない常にアインズの部屋まで駆けつけられるよう万全の体制でいる。ここでは杞憂でしかないのだが。そうしていると部屋の扉がノックされ
「フレデリカでございます。よろしいでしょうか」
「どうぞ」
　そういって中に入ってきたのは金髪の髪を伸ばした碧眼の女性だ。しかしその口の中にはびっしりと牙がそろっていることで人間でないことがわかる
「お客様とスバル様のお話が終わりましたので、お呼びに参りましたわ」
「わかりました。では行きましょう」

「待たせてすまなかったな。セバス、アルベド紹介する。彼が私のこれからの協力者、菜月昴くんだ。」
「いやぁ協力者なんて、こっちが協力してもらう立場っすよ」
「…┃。人間？」
「…┃」
「…！ま、まあ！詳しい話はナザリックに戻ってからするとしよう。スバルくんいきなり来て、すぐに帰る無礼を謝るロズワール殿やエミリア殿、他の方々にもよろしく頼むよ」
「ああ！アインズさんもこれから大変だろうけど頑張ってな！」
魔法が発動し、転移が行われる

「戻って早速だがアルベド守護者を集めてくれ」
「はっ！ただちに」

―1人で協力とか決めちゃったけどＮＰＣたちの気持ちも考えると、どうにか上手くやらないとか…

すると、すぐさま

「アインズ様。第４階層守護者ガルガンチュア、第８階層守護者ヴィクティムを除く階層守護者各員御身の前に」

「うむご苦労。では今回のことについて話すとする。侵入者、に関してだが敵ではなかったよって警戒体制を引き下げろ。アルベド」

「はい。アインズ様その事に関しましては敵で無いとわかりました際に既にデミウルゴスによりなされています。」

「ほう。デミウルゴス」

「は。アインズ様の侵入者への御対応を見た上でそう判断させていただきました。」

「よい。よくやってくれたデミウルゴス」

「は！ありがたきお言葉」

「では本題に入ろうまず、今回私がナザリックを急遽離れ会いに行った相手だが…」

統率方針

「…―というわけで、この世界はおそらくユグドラシルではない。つまり外の危険は未知数だ。まだ不確定な情報ではあるのだがワールド・チャンピオンに匹敵するやもしれぬ存在もいるらしい。慎重に物事に取り掛からねばならぬことを心得て行動せよ。」

「―は！」

菜月昴からのこの世界の情報を守護者へと共有しているアインズ。

有能な社員を腐らせるような事はしたくない。言うなればそのような考えがアインズにはあった。さらに加えて仲間が残した彼らに、心を持った彼らにただナザリックを防衛させる「だけ」という事が非常に心に刺さる。それも無論大切なことだが。

―わかっちゃうんだよなあ。

彼ら階層守護者は全く態度に出さないが、渇望が分かる。アインズの役に立ちたいという気持ちが

―答えて、あげたい。

「ここまでは、今回のことで私が手にいれた情報の共有と注意喚起だ。これより我らのナザリック地下大墳墓の目指す所を定める！心して聞け」

『―は！』

守護者達の纏う雰囲気が変わる。やっと待ち望んだ答えが聞けるかのように。一言一句聞き漏らさないという意志が爆発したかのように錯覚させられる。

―ナザリックの在り方。ＮＰＣ達の求めているもの想像でしかないが。そしてもしこの世界に俺以外に仲間がいたなら…これらを考えてそれっぽく言おう

このとき実は仲間への思いよりもＮＰＣ達への思いが少なからず勝っていたことはアインズも気付いていない

「我ら、ナザリックはこの世界の全てを手に入れる！」

守護者たちが色めき立つのが全く表には出さないがひしひしと伝わってくる

「あらゆる地に赴き、敵を打ち砕く。さしずめ世界征服だ。異論はあるか？」

「至高の御方であられるアインズ様のご決定に異を唱えることなどありましょうか。貴方様の御心のままに我ら守護者全身全霊をもって努めさせていただく所存にございます。」

守護者全員が同意の意を示す

「よい。期待しているぞ。それにあたってのおおまかな話は守護者統括アルベド、防衛時の責任者であるデミウルゴス、時が来たら両名に伝える。守護者よ各々の努めに励め」

そう、言い終わると同時に転移門が開き、ローブを翻し舞台役者ばりにアインズはその中へと入っていった

アインズが去った後の闘技場に静寂以外のものはない。
「…ふふ」
誰ともなく込み上げる喜びに笑いがこぼれた
「す、すごかったね…」
「ええ、それに…世界征服。なんて甘美な響きなのかしら、」
「アア、胸ガ沸キ立ツナ…」
「そのための王候補者の関係者との接触だったのでしょうか。なんたる対応能力。感服いたしますね」
「アインズ様の世界征服に助力できるなんて！たのしみー！」
「…それは少し違うのかもしれないよ？」
「え？」

二人ほどの守護者を除き皆がデミウルゴスを見る

「アウラ、アインズ様の世界征服と言ったね？」

「ええ…」

アウラの顔には「違わないでしょ？」と書いてあるような素直な疑問が表れる

「おそらくだが、アインズ様ご本人はそこまで世界征服に重きを置いていないと私は感じたね」

「ドウイウコトダ、アインズ様ハ確カニ世界征服ト仰有ラレタ」

「重要な部分が違うのではという話だよ。アインズ様のお話の中の協力者は人間と言っていたのを聞いていただろ？そしてこの世界は人間、獣人などの人間種が多いとも仰られていたそこで世界征服などしても協力者様が悲しむとは思わないかね？」

「それは…、確かにそうだろうけど人間かぁ」

「納得ハイクガ、ソレデハ世界征服ガ出来ナイデハナイカ」

二人がそれぞれの疑問を口にすると

「アウラ、人間のいないナザリックではあったが。やまいこ様の妹様も人間種なんだよ？」

「え！そうだったの!?」
　至高の４１人のことを深く知れるのは喜びである。驚きと喜びのなかでアウラが表情をくるくる変えている

「そしてコキュートス、なにも世界征服をしないというわけではないのさ。セバスの言っていたように王候補者の関係者であり協力者のナツキ・スバルという方、彼の存在は大変大きい。アインズ様はおそらく力、ではなく慈愛心と叡智により世界を統べられるのではと考えている。」

「「おお…」」
　複数の感嘆の声が上がる。
　さらにそれに続いてデミウルゴスが話している最中に黙っていたアルベドが口を開く

「そして、そうお考えのアインズ様があえて、世界征服という言葉を選んだのにも理由があるわ。」
　デミウルゴスに集まっていた視線は1人を除きアルベドへ集まる

「なんと慈愛に溢れることか。アインズ様は私たちのことをお考えになったからこそ世界征服と仰有られたのよ。」

　デミウルゴスが満足そうに頷いている

「すでに最大の敬意を払っている私たちに発破をかける意味でね。世界征服と言われて素直に嬉しくならなかったかしら？」

「そりゃそうだね！」

「ウム、心沸キ立ッタノハ間違イナイ」

「なんとお優しい」

「さ、流石アインズ様だね！」

　それぞれが顔をキラキラさせながらカンストしている忠義心が上限を突破させていると、急に苦虫を噛み潰したような顔をしたアルベドがここまで一言も発していなかったシャルティアに向かって唾を吐くように言葉を投げ掛ける

「して、シャルティア?どうしてさっきから微動だにしないのかしら?」

言葉に込められるだけの棘を込めきった声色で質問を投げ掛けられたシャルティアだったが顔を上げた彼女の表情はヨダレが垂れて顔も恍惚にそめられ蕩けそうなものだった

「アインズ様の強力な力の波動と言葉による慈愛の心に当てられてちょおっと、いや大いに下着がまずいことになってありんす。」

うわぁ…

という雰囲気の守護者たちと殺意を滾らせたアルベド。

この後アインズの夜事情に関して並々ならぬ討論がされた。だが結論はでてもそれが実を結ぶのは先のこととなるのだが

ナザリック内のアインズの自室そこでベットに身を投げてシーツにくるまるアイン

ズがいた
「もー、守護者達が集まるの早すぎない!?考える暇もなくて結局聞いた話をして目標は世界征服だーって言っただけだし。そもそも世界征服って言って勘違いとかしそうじゃね？しっかり軌道修正していかないとか。スバル君の邪魔になったら元も子もないからな」

―とりあえず情報だな

ベットから立ち上がったアインズは別の部屋へと移動するクローゼットなどがあり、全身の写る鏡がある
「剣を」
一言アインズが言うと寝室を出たときから付いてきていたメイドがその身長と同程度のグレートソードを手渡す。それを構えて振ろうとするとその手からあっさりと滑り落ちてグレートソードは地面に転がった
「ふむ、他のことは現実のようなのにクラスにない装備が使えないのはゲームと一緒だとは…」

一呼吸置いた後にアインズの全身を漆黒に金の細工が施され紅いマントを付けた全身鎧が覆うとともにその手には先程のものと似たグレートソードが握られていた「ふん！」それを力一杯ふるう

「魔法で作ったものなら使えるというわけか」

「…私は外へ行く」

「でしたら近衛のものを準備は済ませております」

―うーん…息抜きも兼ねてるんだけどなあ

「いや、極秘に進めたいことがあるついてくることは許さん」

「かしこまりました」

転移をするリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンで転移できる最も地上に近い部分霊廟の階段の下まで転移すると

―んん!?
なぜこいつらがこんなところにいる?

そこには魔将の名を冠するレベル８０を超えるモンスターがいた
―奴等はデミウルゴスの側近のはずなんでこんな浅い階層にいるんだ?
すると魔将たちは膝を折り敬意を表す。そしてその影から
―なるほどな
デミウルゴスが表れる。そして同じく最大の敬意を表しながら

「これはアインズ様。共を連れずにどうなされたのですか?」

「ああ、外へ行こうとおもってな」

内緒事を親にバレたようなむず痒さがあったが、堂々として「なにか悪いか?」といった態度で対応してみる。するとデミウルゴスが納得したように

「なるほど、その御慧眼さすがとしか言い様がございません。」

―え？特に何も考えてないんだけど…

「ですが、共を連れずにとなるといくら至高の御方だとしても見過ごすわけには行きません」

「そうか。ならば1人だけ追従を許そう」

「は！私ごときの考えにご配慮いただき誠にありがとうございます」

「ならば、行くぞ」

歩き出したアインズにデミウルゴスがついてくる形だ。

―お前が来るんかい！

「飛行／フライ」

マジック・アイテムによりアインズが飛翔すると「ォア、ガガガ…」と鳴き、蛙のあたまに蝙蝠の翼を生やしたデミウルゴスがそれに続く。

ナザリックの周りにそびえるのは高さ数十メートルはあろうかという木々の森林だ。だがただの森林ではなく全てが凍りついている。根元から葉の1枚1枚まで。

「抜けるぞ」

そう言ったアインズ達は凍った葉を突き抜け満天の星空の下へと躍り出た

「おお…！」

満天の星空。ただそれだけだが初めて見たアインズにとっての感動は大きいと言わざるをえない

―第六階層のブルー・プラネットさんの星空も凄かったけれど自然の星空はこんな

に。

「素晴らしい。まるで宝石箱みたいだな」

「お望みとあらばナザリック全軍でアインズ様の下へとこの宝石箱を献上させて頂きます。」

「ふ、それは既に決定事項だ。だが、力業では宝石が傷付いてしまうかもしれぬな私は綺麗な宝石を所望するぞ?」

そんなキザなやりとりをしてアインズが少し気恥ずかしくなるがデミウルゴスは嬉々とした様子で

「かしこまりました。」

と一言

「しかし夜か、出る時間を間違えてしまったな。まあ星を見るためということにしておこうか。戻るぞデミウルゴス」

そして墳墓へと帰ったアインズに無断外出の制裁が下されてしまう。セバスのような普段静かな人ほど怒らせると怖いと言うことだ。まるでたっち・みーに怒られているような気持ちになりながら反省させられたアインズであった。

妄言、虚言、無限に実現

「「ジャンケン、ポン！」」
「ッち向いてェオラァ！」
「ふはははは！気合いだけじゃあどおにもならんぞ！」

「「ジャンケン、ポン！」」
「あぁっち向いてぇ、ほい！」
「がァ！まッた負けだ！」

「それじゃ、ガーフィール罰ゲームだ。ベア子何がいい？」
「なんだっていいのよ、ただ、さっきと同じのは…」
「よし！罰ゲームはベア子のものまねで」
「さっきと同じのは嫌って言おうとしたらこれかしら！もう３回目なのよ！」

「しかたねぇ、『ニニググの頭ン中は金色』ってなァ。」
「謎の慣用句もその辺に、ささ！」
「あんまり変ならスバルのマナを吸い尽くすかしら」
「それして一番悲しむのベア子だろうけどな」
「な！」

「オッほん、図々しいかしらァ人間ン…目障りなッ奴なのよォ」

「お、おっかねえ！」
「あんなの可愛いベティの欠片もないかしら！」
　ガーフィールの罰ゲームを見て「ひしっ！」と抱き合うスバルとベアトリス。ちなみに今のものまねはスバルが屋敷に来たばかりのころの思い出話のさいにガーフィールに教えていた気がする。
　スバル考案の「あっちむいてほい」に興じる彼らの目的は人を待つことなので時間を潰していたわけだ。
「微笑ましいことだーぁねぇ」
「ええ、ガーフのものまねは壊滅的ですけれど」

「ツンだよォ！そんなに似ッてなくもねェだろォ？」
「なんだよ大将、肩に手ェ置いて。おい、なッんだその生暖ッかい目は！」

アインズの訪問から少したった今、そのアインズに関する事柄の共有のためにスバル筆頭のエミリア派の全員集合がかかっていた。あとはエミリアと迎えにいったオットーを待つばかりである。

「ごめんなさい！待たせちゃった？」
「お、大丈夫だよエミリアたんそれよりオットーに変なことされなかった？…してないよなオットー」
「なんでそんなに懐疑的なんですかねぇ!?してませんし、しませんよ！」
「そうよスバル、あんまりオットー君を困らせちゃわけわかめよ？」
「わけわかめとかきょうび聞かねえな…ってか使い方間違ってね？」

そしてその二人の帰還によって場は整った。
それぞれの椅子に腰を下ろしてこの集まりを開いた張本人、スバルが話を始められる

体制をとる

「じゃあ全員集まったところで重大発表～！」

「わ～ぱちぱち」
「ちょっと嫌な予感しかしないんですけど」
「はいはい否定的な意見は無視してっと」
「扱いがぁ!?」

「なんとなんと我らエミリア陣営に新たな協力者が現れました！」

「…はぁ？」

彼らが疑うのも無理がない。エミリア陣営はロズワールが辺境伯という立場であることを例外とすれば全員あまり顔が広くない。それはつまり頼れる相手が自ずと限られるということその状態でいきなり協力するという者が現れてもただ怪しいだけである。

「そう言うと思ったぜ。だから直接会ってもらったほうがわかりやすいと思ってアポは取っておいた！」

おもむろにポケットに手を突っ込んだスバルは糸電話のようで糸が３０㎝程で切れているものを取り出す。〈最長の糸電話〉ポップな見た目のアイテムで、特に意味もなくアインズが作ったアイテムである。能力はいたってシンプル。特定の１人と１人が意思の疎通を可能にするというものただし完璧に盗聴を防ぐという効果がある。通信妨害に対しての耐性は皆無のため他の通信妨害の流れ弾でダメになるのでお蔵入りした。

その〈最長の糸電話〉に登録してある相手はアインズ別れる際に貰っていたそれを使う。３０㎝しかない糸の先からさらに不可視の糸が伸びる感覚がある、くしくもスバルは見えざる手を使うときと似ていると感じた。

ふよふよと空中を漂うような感覚から２つの地点をピンッと張った１本の糸になったような感覚へと変わると

［もしもしスバル君か？］

［そうそう。それでアインズさん今からそっちに行ける？］

［勿論だともそれじゃあ部下を1人迎えに送ろう］
［ＯＫ待ってますね～］
［ふふ、待たせはしないさ。それでは］
［はいー］
ープツン

「つーわけで今からみんなでアインズさんに会いに行こうと思います」

一瞬の静寂しかしすぐに崩れる

「ちょっと！急すぎますよ！なんでも1人で決めてぇ！ああ！不安しかないぃぃ！」
「大将の知り合いかァ？どんな奴なんッだよ」
「あらぁ、ずーぅいぶん早いねーぇ」

気付くと部屋の入り口付近の床に横一直線の影があり一呼吸置いた後にその影が膨れあがり天井まで届くかという闇の門が出来上がった。そしてそこから黒いドレスに白い肌、銀の髪をもった美少女が表れる。

「お迎えに上がりましたでありんす。至高の御方であるアインズ様のお友達様とその御一行様でありんしょうか？」
「ああ、そうだ」
「ではゲートに入って頂く必要がありんすえ。お願いするでありんす」
「だ、そうだ。さあ早く早く！」

ポカーンという擬音がぴったりの顔を浮かべた彼らをぐいっぐいっとゲートに押し込んでナザリック第九階層へ転移阻害を一時的に止めて直通となった転移門に入っていく。全員入ったのを確認してシャルティアは最後に門に入っていった。

人は見かけによらないって

転移した先に待っていたのは豪華絢爛というイメージを軽く4度は考え治さなければいけないほどの大広間。

しかしその認識は間違っていたとわかる大広間ではなかったのだ。奥へと続く真紅の絨毯。高すぎる天井には奥への道を示すかのようにホコリ1つ無いかのような輝きを見せるシャンデリアが一定の間隔に連なっている。そこは大きさ豪華さを除けば間違いなく『廊下』だった。

「ここはナザリック地下大墳墓、第9階層の最奥部。第10階層『玉座』へと繋がっております。なお、ここからのご案内はシャルティア様ではなく私、ユリ・アルファが務めさせていただきます。」

スバル一行が気付かない一瞬の間に先程までいた銀髪の少女は姿を消し、黒髪にメガネを掛けたメイドが1人現れていた。

「ほえ～凄いなぁ」

「スバルはこういう時いつも落ち着いているわよね。私とか新しい事だらけでさっきからずっとびっくり仰天なんだから」

「エミリアたん、びっくり仰天ってきょうび聞かねえな。」

「確かにバルスだけ知っているような素振りで気に入らないわね」

「スバルばかり状況が分かっててずるいかしら。詳しく教えるのよ！」

「いやいや！俺もわかってる訳じゃねえから！ただすこーしだけ妄想と言う名の予備知識が多かっただけで。それよりアインズさん待たせるのも悪いから早く行こうぜ、ねえアルファさん？」

「はい。そうして下さるとありがたいです。」

　ユリに連れられて先の見えない無限に続くような廊下を歩いて行く。ちなみになぜユリ・アルファが案内役を勤めているかと言うとプレアデスの中から1人案内役をと、アインズに言われアインズ考案の『じゃんけん』なるもので決めたときに『拳』での『勝負』事において補正のかかるクラスを持っていたユリが実は有利だったため最後まで勝ち残っていたためである。

「すいません、アルファさんはアインズさんと言う人のお仲間さんなんですか？」
「お、オットー久しぶりにしゃべったな」
「ええ、僕は一般人ですからスバルさんみたいに一瞬で状況に対応出来る訳じゃないんですよ」
「おまえなあ、まるで人が一般人じゃないみたいに言いやがってベスト・オブ・一般人とは人呼んで俺のことだぞ？」
「はいはい。それでどうなんでしょうか？」

「仲間ではありません。配下のメイドの1人です。今のナザリックにはアインズ様の配下の者かシモベしかいません。」

「そうなんですかでは配下やシモベの方々は何人ほど？」

「そういったことを把握している者は他にいるのですが…万は下らないのではないでしょうか？」

「万!?万ですか!?スバルさん本当にそのアインズさんと言う方は仲間になってくれるんですか!?」

「んー？大丈夫だろ約束したしな」

「一気に大手の商会の会長とかに会う時の緊張感が、が、が」

　そして廊下を歩いていると唐突に何もない空間で暗転する。まるで瞬きのように自然にすると無限に続くかとも思えた長い廊下に突き当たりが見えた。ここからでも分かるほど巨大な扉。その左右には悪魔と天使が彫られている。遠くからでも分かるあまりに精巧に作られたそれらは今にも動きだしそうであった。

扉の目の前まで辿り着くと、

「私の案内はここまでとなります。この先でアインズ様はお待ちです。」

礼儀正しく完璧にお辞儀をしてみせたユリ・アルファに促されるように扉へと近付くと

「大将オ、この先本当ッに味方なんだっろうなァ。もし1人でも敵だったら、死ッぬぜェ俺ら。」

ここまで最後尾を歩いていたガーフィールがスバルの横まで来てそう言う。隠しきれない冷や汗を垂らして

その言葉を聞いて他のメンバーにも緊張感が張り詰める。しかし、その言葉を否定したのは不動を貫いていたメイドだった。ほんの、気付かれないようなほんの少しの笑みを浮かべて

「ご心配ありません。アインズ様がそのお名前にかけて歓迎せよとおっしゃりましたゆ

え、危害が加わるようなことは一切ありはしません。」

力強く断言したユリ・アルファの言葉に幾分か安心したような雰囲気が漂い一行は扉へと向き合う

「それじゃ！あんまり待たせちゃ悪いからな！いこうか！」

そして1歩踏み出すと重厚で何人で押しても開かなそうな扉がひとりでに滑らかに開く。

―そして

パァン!!

「ようこそ！ナザリックへ！」

「それで配下の者達は私自身が外に出ることを否定的なのだよ…」
「アインズさんも大変なんだな」
「ああ、だから何かあったら部下の者を送るからよろしく頼むよ」

※※※※

「ですので、ガーフィールさんは戦い方を鍛えているのは良いので、力の伝え方を鍛えてはいかが？」
「力の伝え方ッてもなァ…想像しにッくいしな。」
「力を波で考えるのおそらく身体能力的にはボク達プレアデスと大差ないわ。独学で考えてきた技を他の人から学んでみるのも大切よ？」

※※※※

「フム…氷ヲ使ッタ戦イ方ヲ目指シテイルノダナ。スマナイ、ソウナルトアマリ私カラ教エルコトハ少ナイカモシレナイナ。私ハ氷ハ単純ニシカ使ワナイ、冷気ニヨル攻撃ヲ

中心ニシテイルノデナ」

「そう、残念ね。氷の武器で戦う戦法をスバルと考えたからそれをもっと強くできればなって思ったんだけど。」

「氷ノ武器デ戦ウノカ！ナラバ話ハ別ダ。コノナザリックデ私ハ武器ニヨル戦闘ハ得意ダト自負シテイル。武器ノ使イ方ナラバ助言モデキヨウ！」

「本当！すごーく助かっちゃう！」

※※※※

「可愛いメイドさんっすね！いまいくつっすか？」

「17よ。離しなさい私はロズワール様のところへ行かないと」

「いけずっす～！ラーちゃんお姉さんと良いことしないっすか？」

「私はロズワール様一筋よあきらめなさい」

※※※※

「貴方がスバル様の妃？」

「はあ？何を言っているのかしら！ベティはスバルとは契約はしてるけれど婚約なんてしないかしら！」

「あら、そうなの？貴方から1番信頼関係を感じたのだけれど。恋に歳も種族も関係ないわ！ああ！アインズ様！」

「見た目まともそうだったのに中身は残念かしら…」

扉を開けた瞬間のクラッカーによる歓迎から小一時間、それぞれが雑談に興じていた。自然とある程度の共通点があるもの同士が話ているように見えるアインズ組とスバル組それぞれが協力関係になることが今回をもって双方の共通認識となった。

そして最後にスバル達が屋敷に帰ることになったとき

「今日はありがとうアインズさん！まじで心強いよ！」

「はは！またいつでも来ると良いスバル君のお仲間さんもね。直通の転移門でも設置し

ようか」

「またあれ通るんですか？僕あれ苦手ですよ」

「んじゃオットーは帰り歩きな！ちなみにここエリオール大森林の中だぜ」

「待ってくださいよ！初耳！ってか置いてかないでくださいよ!?」

「お、なんか既視感あるなデジャヴ～」

「ふむ最後に提案なのだがそちらに私の部下を連絡員として住まわせるのはどうかな？」

「俺は大賛成だけど皆は？」

　誰も否定の色は見せない

「私は必要なことだと思ーうよ。歓迎しようじゃーぁないの。」

「よしよし。何人くらいが良いだろうか？」

「人数は最初二人とかでどうだ？少なければ後から増やすとして、誰に頼むかだと、あんまり人形から離れてるのは外を歩くとき不便になっちゃうかもしれないし…」

「なるほどな目立たない方が良いかならアウラ、ユリお前達に命ずる」

「「は！」」

「不都合があれば追々になくれぐれも『仲良く』たのむぞ」

「「拝命承りました。」」

「それに付随してだなこれを渡そう」

「これは！リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン！よろしいのですか!?アインズ様！至高の方々しか嵌めることを許されていないものをわたしなんかが！」

―別にそういうわけじゃ無いんだけどなあ

「よい。これから任務としてナザリックを離れてもらうが緊急の用事が出来たときに不便であろう?ユリお前にも渡そう」

「ありがとうございます。アインズ様」

「よろしい。では行け」

「これからよろしくお願いします改めましてユリ・アルファと申します。」

「アウラ・ベラ・フィオーラです。よろしく!」

「よろしくな!」「よろしくね」「おうッ!」「よろしくお願いします」「よろしくお願いするわ」「よろしくかしら」

来たときと同じように転移門でロズワール邸へと帰る。ただし二人の新メンバーを連れて。エミリア陣営は一気に大きくなったと言えよう。まとめあげるのは至難の業

かも知れない。

森妖精タラシの竜と、竜タラシの人間

菜月・昴はゆとり世代に産まれた由緒正しきただの日本の高校三年生。ついでに言うなら引きこもりである。そんな彼はコミュニケーション能力が一般の人とは別ベクトルに伸びてしまい孤立してしまいがちであった。しかし異世界に転移してはや1年も過ぎた今はすでに馴染んだと言っても差し支えないが、流石にダーク・エルフの子供の機嫌の治し方などは知らないわけで━…

「なー、なんでそんなに怒ってんだよ…」

屋敷の案内をアウラとユリにしようとした時に「ユリはメイドだからそういうの大事だと思うけど私はビーストテイマーだから動物達の所にいってくる！お屋敷の事は後でユリから聞くね！」と言って別行動を初めて小一時間、屋敷の案内が終わった所に不機嫌そうに帰って来たアウラに事情を聞こうとするスバルをキッっとアウラが睨み付ける。

「あの小屋の竜！体格も頭の良さも肉付きも鱗の艶もすごく良くて、もっと良くなるのに全然お手入れされてないじゃん！ダイヤの原石…いやカロリックストーンの原石だよ！」

確かにパトラッシュのポテンシャルは超一流だとは思っていたがここまで言われるとなると相当のものだったらしい、いやはや全く自分には勿体ない駿馬もとい駿竜だ。しかし、カロリックストーンとはなんだろうか？

「しかも…私よりご主人様がって全然なびかないしっ…」

「あー、そっちが本音か」

ニヤニヤしながら言うスバルに悔しそうな目を向けるアウラという状態である。守護者として個より群としての戦闘に特化しているアウラにとってその群との絆は重要であり、こと動物に対しては神獣、幻獣までも手玉にとるビーストテイマーとしての手腕をもってしてもパトラッシュの一途さには敵わなかったという結果に納得が行かない様子

「いやーうちの相棒もとい愛竜の信頼には頭があがらないっすなあ！しっかしもしアウラちゃんになつかれてたらこれはネトラになるのか？ＮＴＲ？いやしかし俺にはエミリアたんが!!」

「私も居るのかしら！まず、人と竜じゃ言葉が通じないのよ！」

横から可愛い蹴りが飛んできて軽口も中断させられる。

アウラの不機嫌の原因がパトラッシュとはつくづく罪作りな地竜だ。

「でも確かにパトラッシュにあんまりしっかりと手入れしてあげれてないなー」

「地竜、特にダイアナ種は自分でほぼ出来るから忘れられがちになるかしら」

「えぇーー！もったいない！スバル様、この子をトリミングさせて！」

「…え、切り取るの？」

「ちがーう！お手入れのこと！」

確してパトラッシュ美竜化計画が主にアウラによって立案されたのである。

「しっかし、じっくり見るとパトラッシュおっきいな！」

「本当ね。背の高いスバルが居るのとパトラッシュちゃんが大人しくしてくれるからできるわね！うんしょ！」

「ー!!背伸びで頑張るエミリアたんまじＥＭＴ」

偶然通りかかったエミリアも巻き込んでパトラッシュ美竜化計画は進行中である。まず、硬めのブラシで汚れや古い鱗などを除去、次いで細かいブラシでもう一度ブラッシング、その後アウラが持ってきたクリームを塗っているところである。

「ふぅ～クリームもあと半分くらいね！ほんっっとこの子いい子！…そこで、スバル様？歯磨き…してみる？」

子供がイタズラを思い付いたような、はたまた策士が練っていた策を披露するような表情でアウラはそう言う。

「お？いいぜ！やっぱ竜も歯磨き必要なのか??」

「んー厳密には無くても大丈夫だけどした方が良いことには変わりないね！」

「よし！まかせとけ！」

「まっ！パートナーとの信頼がないと腕パックリいかれちゃうけどね！」

アウラとパトラッシュの顔を交互に見つめる。アウラは変わらずニコニコと、パトラッシュはなんとなく貴方のやり方次第ねと、言っている気がする

「そんなことしないですよね～パトラッシュさん…？」

「ースバル様！みなさん！」

声がした方を向いて見るとペトラが裏口の方向から走ってくる。この竜舎があるの

は正面からより裏口からの方が近いので当たり前といえば、当たり前だが、もう1人分人影があったそれは愛くるしい小柄な獣人で3人姉弟の長女。だが見た目に似合わずアナスタシアの私有兵団のサブリーダー格であったりするのだ。

「おひさー！なにこれすごー！地竜ぴかぴかー！すごー！」

「久しぶりだな！ミミお前は超元気だな！今日はどうしたんだ？」

「んとねー！ミミ今日お仕事で来たの！　えっへん！」

「おじょーの伝言役！　パーティーのお誘いー！」